複記響集

へ13
3224
18

東京都立中央図書館蔵

梅おとらん美のく序

南枝不雪より積頃より一輪ひらく梅の花
の枝ゝの願ふ古へ方寸三鏡宝珠の恵を祈る春
ちあゝさの賣生ゝよ多願ふ女の門出ゝ色星玉
女比利益あるべし外題ひらく天星玉女の
神徳不思議方寸賣ゝ来たるべき八將

特
門 へ13
3224
巻 2/
昭和十年
七月四日
聯支

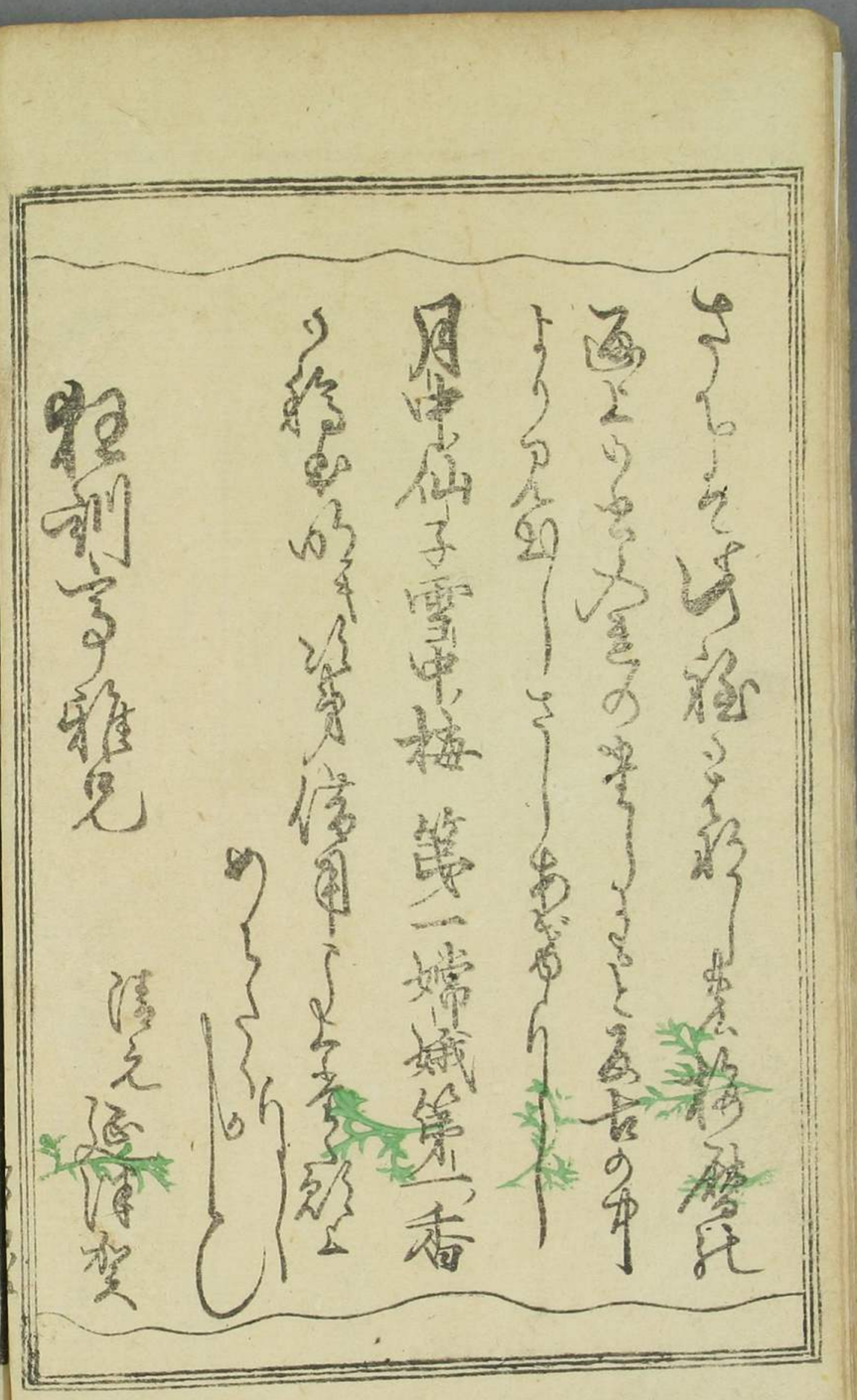
神の丈位は拵えの建と仕立て切形よく平を表
裏は四角に重ねて除きひやのまて破き虫喰い
表紙附立直を定の當月は執えんぎは成納
堂を開の斎官は作者の願は深判満と則板元
藏八ツ天恩月德四季の土用ハいふも更春夏秋
冬止時分日の注文進摺とハチト慈円の十干十二支
土公を拵そん方直の出るとの部数の唱へ諸君
遊行の間の日まを出ずぬ此冊子をもて拵ひく拵ぐ香法
ふ法風純金厚もふ風を取立と願ふ方の十方ぐし
八方金神の中央は座ての三四年の笑居もや解
ふ歌薄氷喜ん四澤ふ清るとふ時を忘ぐもや花
お兄文永堂の引き柳川重信画の愛敬で何卒

ゆゝ敷大當日あさりもよ年の梅
尊神よ供一陽来福の吉書ぞめ
干時天保壬辰年春正月吉発行
宵よ墨ゑみを硯すりうけて筆を染
江戸前は市隠狂訓亭
為永春水主人

艶容敷く
浮流で交く甘はを
うまと貞烈
真操
堅き操も和らぐ乱れ
傾ー栄躰談子実子山妓八
美女といふべー
鎌倉多津美の藝妓
譽祢八

美人
在南国
表
無
年
回
艶
婦多川千葉の
倭町ふ住
通客 藤兵衛

唐琴屋の養子
飛助次郎
珍珠花簡
五無双
月明楼雪
映梅花
右八橋舎
唐琴屋の
虚女阿長



月中仙子雪中梅　第一婦城第一香

春色梅兒與美卷之一

江戸　狂訓亭主人作

第一齣

野に捨て笑ふ用ありて仙花。そなはるなくふる仙花の霜除なぞなる俗伝居柱木の頃も同系なる外国の実と宮の中の郷家数千年の世ごろ家数ろ第一主人享数十八九人系

職しうらねども。落命なる人多りろん。貧苦不せ多
其うへ。ひわど病の家ふ一不自由の上ん方も多
家庭も其の言ふ様いそぐ家けき新宅。男ふまこぐ
どうとも顔猛びしきの戸ふ「千とー出先るさん
ましく「アイごさまこと」女「そへいへ。おまへハ貧乏さんと
いひつあけう陳ふまさへ。ぢひ茶屋ふ出ようくとあけて
久延甚安上田大蔵の前の接痛ふ島の小柳ふ出まの安
主の病酒を繁常ふ一ゆるハお納戸の中敷

病ん。おとそ改巾をふ持くこぐ見ー始まの後回
醫まこ顔自慢ふ寝起の侵ふつくろいねども美しき。
其の安新ふ楽の月元真ー見ハびっくり面ふちまぐる
主「茶ハどやアれへうどへーて来こそ。そーて陽まて居る此
と。ぐ新ふ見ふ。ぎるこ。マアくどちくへ茶どやっ見
うト おれうよれ「こちき来アア茶。参ふ人ふ見門て絶
てナいろ
ぐぐきくしてそそーてへ。ふ来ひぐ歩ふくこんぐろ
ア苦ールト なれを 掴ぐひっつくよみぐトーひひぐ
たき おまへん

ばかりくるさろーやるのくんトづくあをつく
ゑのこうまんエハまの者ごヨ。の時ぶろうくいのごく丑三
十ゑ六月路ろうヨ大遠ることでもわくが。どてもゑ義ぶ戌で
なくわくそゑハいくぶるくやろ。どくて紀川て来このご。
関でくとるくんとあるトさとーるきごよれ「ナニ今軽い如ゑる
へ来ゑまふ来こつゑるで宅ハ出すくヨ宮ふろくぎる
とこヨ わくおゑ揚ぶ此猫ることふ市宝竜とのふとふ。ゑくヨ
美ゑも ゑくるんごぶ子此頂月くて暮て居るゑくどッ

てのが、まづいつやくしこゝろぞうまづ幸所の方ごとといひまして、そまつゝ居ることを聞く。其子が宅の主人の世を
するゆゑ。どうもたゝの拾ひがあまくさんの拾ひのよ
だうゝ。其晩一所に寝ましてようく聞くゝ宅に来る
気ゝ美しいお内宅が居るを言まして、やう
遠ち。ちと思ひく。猶今日しく聞くれバ。あまくさんの主
ようおくさんの方が年ゝ人のまうごとといひまして。さ

おくさんハとよして寝うゝ居るれとのゝ。聞べきて
ゝどうあまくさんのようなる位持ぐ。もうくどゝも気
あい。今日の拾ひまうゝハ。うんでも見れようと思ひ
十四日を年ゝまして。ぜくゝ来さんであるとまさうる。
頃の念力といひめく。風とゝうゝあまくさんの
家が知まるものく。妙見さるのおうげごと。嬉しのお仕
気ゝ。おくさんの。おくさんが。あるもの。今日ハごとく

お使ひの人　主「さうまらねえ。どうして女房ぐらうる
のもそして其子ハ何の娘ぐらい　連「るんぐろ家ハ
八百屋ぐらひのもしらしょう。そうまたアいくじゃあり
せんう。おまけんてアそまてよろう。今ぐらア私のてるんぐら
四ひ半しも。おてハおるさるさいまそして時ふきのこと
お角ちのことをうくさびしも。いくじゃありませんか。主「ナニサ
濡もぐもどやうねえ。ばかなものをよくつのりてるぶの。
其子のしぐらも。ばかぐら智恵もまねえ。てアそうそう

そうと宅のようのすいどうのこと。連「宅のようなえ大変サ。
多勝どんの義ぐらア。陽ふ見物さんとのまてえ。ばかぐら
屋ぐらのサ。そまぐらまで。四角宮の主世る時さえあの
ようのばかぐらものをどふしてそえいのばかいきまし
ものそまを何の角のこと言く三月ふあげぐ見物ハ
のめぐ絵ア来ます。はんハ私も金蔵ちまさんの来そこ
ばかしてこそうそう。ばかえばかそこれと思うて。寄をしんで
居ちまさまでもぐふもあくいえ。来るぐらそ。そもち

ふるうく如をめへと。今日やすでやう乞場しく居さうれ
ど。おまそんの宅ハ初見るし。そしてマアトあさうをたまくく
ら出ぬ程なるい形勇ふるうくあさろくやうのさたそ
ぞへしてあとこの宅ハ居く見さきたものう。私まそ今日
敗ろくあるく。仕けへをねづくく。婦美川くでもりて幸
陽しとおまそんの勇をかしも楽ふさ世やとくまエト
きんどう天下一文の男ハあるくきのである「エモシそしてきみ書みれしくるれ宅ハ
マアどへしくと沢ぐ意ふ勇代ぐかたくるくるのであり

中ハ上上「さまびサ今さく考くそやアあ川ぢり乗ふ
ぶ先の勇沢のれまへとあまを合ろく恵ふ中を塞身上ふを
弟和ぐおまを悪意ふるそんるとハ驚考ぐば遠のく
ふまび儲金のぐ。緩ぐくそふをしくと。出るるあくま
乗ふへいも制をあさまそ百表の金も豊恵くいまれば
ト変ふまるくく宅へ出へもるくば意伝屋通とさまる
のハとんるひ方ぐふくくあ西表ふくよ豊ふ先の
身上へふんさんしてやぐ後日ふるとこまぐのると云て義

浪松左衛門富山さまへ出ていたす百姓の儀ハ
おすみよりたその代り金弐拾両の百姓ハ彼方七
十姓ハ外の者へつかしもとゝいろく
聲をとゝろく妙系寺一宗だんとう久八とゝ彼方
伝切よりおもろ名代よ富山さまへ
いとゝびつかいまゞ先達ちく松左衛門
用の西家の西郷のとそてあるまゝ
橋系寺又百姓よ御りくとゝ
さゝ表ハ第ちる又百両をさゝ
上納いたせといわれてびつくり
表ちく久八ハ宅へ役人流ハ
立西家ハびつくずおもつくろ
ちうせちく和家入の金よ松左衛門
乃事周左のこせ大ハびつく
おもいまびく世をきのハ身の
時く久八ハ親系寺又

くやしい顔をきいてじやアねへか　よね「ヲヤ〳〵不聞も毋ね
ねへ。そしてまずおまへさんの病気の世話をさせまする
主「十二世話といふく居付く世話の者でもねへが此屋の
前やすこおもは世話になるのハ今すこしさ久八といふ
人。のおきさんの妹が女髪結をして此世話になつて居るが
そまず時々来て行のこととしてくゐるのサ　よね「そうかへ。
其女中とハ　主「女中じやアねへハ何のこつた　よね「なんでも
今ハのエエぞのも気になるねへ　主「なにそんな悋気の深
浅じやアねへかまアなんして居てもおめへさん実に仔細イヨト
のぶとい。　よね「こう負惜へなぜそんな悲しい事をお言なさる
のぶとも斬して　お奈實気が知るからハぜんたる事と思
志でも私が男のおよぶべしとけハおまへさんに不自由ハさせ
やアしませんからも氣を高めりと持て早く能なりな
お言なさんなこんな淋しい所に夜も独ぐマアさぜとふ
衾を被けて背と頭と遠く寝て居るからなる
此とくたとへ閻魔ハ鬼も角も大町小町世の石負朋

ふぐらとそ。仏のるも。花の笑つこ。笑ひ。其の人が三度を
聖のをとなりでこるさる。宮さんぐ。和らる。長女俗
居。おるのやこるる。男の心。脱まて。女のかくふ。千万吉量
のの目の。笑ぐよそ。同ふ。知まぬ。歌きるり。男ハるこを
ふれるぐら。主「何ナおのらア。斯ーて。人ふ。遠ぎまーた
居る。角ぶんぐるる。不自由も。仏のも。あることがねく。どくも
自由ふるるれく。角のうくぐるる。「サるそまでるる
モウこを。解りくあまや。主「そんなるを。言ハ
ねくでぐるるこを。乃ちくんる。そーて。モウおそと
なるぐるくりくく。「ナニ今。彩ハおそくるる。用ふを
あて。まるくこョる。奥座敷のふ。ふのちくぎ。ぬとりのハこるふの
そのくのまるくの。ちくさんの。紙さんの。紙まくのまま。こるくく。雪ふ
まで。ぐくく。彩て。まるうるるる。ふ。今日
ふくを。くんで。まぐよ。ョ。そーて。親青さんと。洗ーふ
きんへ。百度。ーて。解るうるる。ぐるる。隠ぐ。ぐまるぐ
まるこをぐふ。ーてるくよ。ーでありまるョ。ぐ

一つもるひねへトいのうぐらいちだをさぶし　茶を煎でこの
あげ　上ようどの玄関ぐる　主「その火鉢の縁にあるヨトいくぐまてこと
のくるりをしやうぐ　生きる妻もその妻のうへにあるごらく　よれ「ごあり
ゆしまヨヤ山のうけと土びんくトおあぶこちらひがちこうる
ちく　ふぐだ　お医者さんハ何所のごえ　主「ナニそまるお漢さんが
世話をしたとしこのご　よれ「おそるおさんとハヱ　主「いのそ
たるしこと久八のうえさんの姉よおること見のその言
たうえさんとハそのエごらへ。ふるをいいがおのくるの言を

加のく居ても八ヨうしいのの　よれ　土井他ハ九ぐる気が角
きあるのちるせんハよ。そして加ハあるちるく　主「ちくある
ちハかめぐ向のおぐきんが来ちく難てしこをとうのく。
て多く縁ぐ屋ちくこらうぐ。ひけ手ちるうハどする多渡歌
せるるのもれく金ちるど遠いうこと多る　よれ「ごこ形ちる
手別をすでハ婚禁ぐうこうどつで仏も喰ら五手せが。
おそるさんと仏のごおのしひ物でるしこぐさしこひる形ちぐ
るんぐで板て上こちのヨ斯して居る中仏ぐ用を思ひ

上切八

円次郎

ど中てに出ずるなれくト　いひまぐるくられしう仰　マアこれで仰ぜ
うしかう　不自由なるものを賞さく　そして身をるる物をちゃを
たべくおんなされよ　今彩八るんの彩ありてばあって。
おまたんおあ八まるるんぐら新まるのうち宮ふ参
だろりーうありやせんョやうと其内新答して出て来ちに
ヨト　先こと先ば男八うけ　とまじやアどんも氣のどくぐそし
ちまきのぞくそうく　よあまち
て来八りまおめくけくるのう　「ナニもうと飯ア来アあるせん
よ。おそくるうても今のうとけぐらく宮八るマアあまんの

首りぐひどくうちとくそうぐそうと来れくあげ
ようくそふくくく　彩持ぐちうくくさうぐるまさるくちふ
主「そおョまぐ居ても能アそうくとさくそくんるア
よね「ぐまとトうくるくそうもちきれ　梯でもようくふ子ア
うまくそうくさ　彩のさー
うく宮ふ王ろ　おそろくれトんくまハ女のうく縛る結方を
あも　男ひ中ぐ　びんぐ　結求るくで移ふ元へひのやう流る瀬の事
あまと　男八振向ぐ　主「よね八るぜ法　「そまぐそも　主「それ
だくてもぐそくく　よね　「まそくんアるぜとんるふそうね

邪のねへ人はあるめへさぞかねへト　おまへさんがそう仰るならよねハがてんの行かぬ顔して
なにゆへひきよせ　主「うんまんして居るよ　よね「ナゼあやまるのだヨ　よね「ヱくゝよ
主「そて自分人はまずで無しい思ひをさせるから
おまへさんハ私をそんな思つてお言ひなさるのだヘ　主「ありやい
そんなことト　ぐちな其実よねハあどけなく　よね「真に嬉しひヨ
座中のひざへよりかゝり寝ながらぞうぞ　主「どうぞとハ　よね「かうしていつまでも居たひねへ
ト ひざハ男もつくぐと見直せバ思ハ　主「アゝおれもてへのトひつ
うけてしきすがるよう
たり寄添　よね「アレくすぐつたいヨ　主「ホイ堪忍しなト

横に倒るゝ此をきこゆるうち観世音の己の鐘ボヲンく

第二齣

遠くて近きハ男女の中とかや清女が筆の妙なるかな拵
丹次郎と米八ハ元の家に住ながらいつしか離れてし
うれね言をたがへぬこゝろの頼母しく弱ねを浮き中の
おのれ丈人二間の破るゝ病の床にまどのも落る縁しよきこ
ちる根を潤の鳥の一しき捨く参人をいミハじよ恥ちて
岩色の恋の欲に玉ぞ流るゝ男の中のる人の貪地とハ知られ

けつく　主丹「ア、ハ　丹「よれそち　茶八その葉を篩へつのぐくんる。
物ぐどきくするうう　男の機嫌を伺ふ
ねトぴつくりして葉を拾ふる　丹「何サ何でもねへがト
ようとう　よれ「ようとう生麦をたくとれへト　丹
「ようとう生麦をたくとれへト
ピアノ赤長ハどくしとのよ　よれ「お長さんエあのるも宝エ
苦労ちのもそヨ。そをふ鬼三湯どんが。何ぶ〜ぶ〜らいそぐ
うう。猫ぶつひしてみる女ちにサ。強ふうもちきも側で乳を
解けくみやにけをども何をいのるもおまへもんのことをかハ

うんうつく居る　あのごろ〜寝ふ　ちのさいとき
ごぎ〜ハやさアる　丹「そふサあそを初年ちゆうあのよるの育
今ようう〜ふひそのごヨト　よれ「さようのサ。おきる別深
ハ猫別ようのくそのごうう。四五でございやうにヨトつを丹「何
さ別ようハらくとのよのでハれへハる。さうう見そのごとのよ
ごヨ　よれ「そをごうう垂程ごとハ　ちゆうせんハよト
なをあのてうを　丹「ゆうねけめへ　ぶつきの猫ア　ふうう何のでも強れ
するのうう　ア志れへ　よれ「さようのサ私ア又ア猫サ。お長さんとのよ宝ま

いくらぐげのあるおまへさんよ。そんなふ苦労するくらゐなら猿
の方がまだましだあるまいのサ　丹「よくいろくるこまいふヨそんな
まぐどうでも猿自に成るトよまを　よね「ヲヤおやそんハ猿をさ
者にさのくへ　丹「猿を　こうそもこされねへでもお稼ておくぶいく
よね「そまでこりてもアサ　おまさんがお長さんのとこにゆうるの
ゑ主長ぶろうのイそよいつさんであるまきさるる　丹「ナニおいろ
がそふいふものうるこでハねへうるふそふぐと言うさんぐ
よね「ヲヤうるいもうるこのもうるいのもうるいそふぐも同じさぐ

あるまさませんうへそんなるう私ゲコろまいうう。婚礼ゝてい
んんるさいナ　丹「ぐでもいくるトいろまそるとうこと考ー島一
さまてうと　よね「ゲヲアんとよる私がコるまいうう。どうぐ婚礼
ゐるく。機嫌をとるーてお長のるさのるトおろくする　丹「そ
なるく婚礼するぐ宅おそくるうぐろふうう。おまぐうと飛
ん　安ぐ　ずふ宅へうへ行さう産ぐ　丹「モウのれ夏ハおやそん
ヒとだふれねのつそいコぐうるヒとがをうぐこ
うるーくるうこう婚ーきハふまさぐうーの高中
がそんるふ中さーくこうく長さへーやるとまるこ猫のこと

解るのが厭なのでありますから、どんなことがあつても喜ばるものを出して、おくんなさいヨ　丹「イヤ、ダメ、ダメ、ダメ」

「こちきろうそうだろう。第一、ら、まてるるいヨ。斯して居さつてもどうぞ嬉敷ハ私のことを思ひ出して、おいでなさいヨト　あぎりうき

「コレまねばとて思ひ出さびい。とうを奴、高尾が金二百なぐらい五ふ思ひおもりるく。浮き甲ひどう思智ふるるこ。まあ、おいしたるまてまたきたの。もやあ為コまたらるく。

とあくんうと義度ら思ひ出しも恋の癖甚勇ふるくれバるくく他貝ふ乃ンとハいるしく阿房ら已ふも言ふ森らしく為よい実ふ哀考びまるも知られ人といつべー

丹「おのひ物を解ら。コレまるる間があるあの　「ふまたも

ノ女房さんのことを思ひ出ー　ちやア居ごヨト　丹「だろう

だろう言てあげとも解るまの度を考る　「イのもしくが

あるまたくのの品物を渡前だろうぐだる。そまたやア宮

何も用ハありハませんが。アノ子がやゝと来るまで不自
由なものがあるだらうとぞんじて使をよこしておくれたのだヨ。
是非こちらからも行ハすると思つてゐたのに。そのまへにとんだ
ことが出来たからネ案じずにハゐられないのサ。おまへさんの胸の法
もあるだらうにヨト ……をうちあけて 丹「まことにすまねへ業をしましたの
まく後へも前へも行かれねへよふなことをしてしまつたのヨ「お
まへさんどうなさるのだへ。どふも腑がおちねへで世間でもいふ悪
法ものがあるまじいことを言つてもよいがヨ 丹「よね米八やい
まア蔭をいはずと関しせはなしヨ 米「よね「おまへさんハおまへさんだよ
しあわせいつもするのだへ。そんなことをいふ人がある
ものかよ。何ぼなんでもそれハあんまりな。どうぞ
…………ハねへトいく 丹「あんまり
…………ぬしはまたよしなくて……
ナア。いつそのこと……………とうからなけれバよね「い
そのことをあとになつてもしかたがねへ。しかしそのことハ
…………すぐによくゐらずへ………ねへ
……よくして解んなヨヨ米八「とふさねへぜんな

ことでございますんさ。ばくをうけるよりもちろんのこと。

ちやアこりゃこのろく。氣を長くしてゆるりまを世ろ　丹「そりゃ

なんでもすべよくゆるるぞろくろ。安心をしてまめ

の身ゆだんをとるでもあれさ時ハるをつくまのくろぐちろく

ぐれくろく。どうぞをまをを黒川く長るるまろ。ひとの眼屋ハ

ちろどろとちをまでぜんわくまもちぐさるとを

ぎまろろとのひらくまろまろまろぶつ

ふぐらぶ高れくぐのョ　丹「アイ

ぶんぐろておをまをんの長くすのるをでさろく。どうぞもも

いくのの二人ぐ身をこれ川てまをまれつまくろるの効居ハちやア

あるなれんろく。業でおれち用とも早く経帷子用ておくんな
さいョそんなろくおきやア実ばきョト赤くとーたまあが
ぶけと成よれきろくと「実度でござれヤの」丹「俗の」
をるぐる
の氣を助けとこのやぐとナこと丹「ムヤョ業水知ごろ」
道ろりを赤れくで解んるョ「十三遠中高をする所が
ありまたのある丹「そーと先刻の反紙を見めく裏へ
牧んでるのじやアれろ。ぐまろるおまぶ形んでやらよ
「アイそんぐけよまやアそのおまんさいョ。よく
氣が付くく異さーとれト赤くて来て。
一いつまで居でも限りハ形へろ。ものの
きろく仕事まろト赤くりとまきめを丹「アコウ業八
丹「ろあいまぐ用ある中ごらけ。イやいくく急で
いきりるョ「アイそんろくト赤くりげりでやくなろ丹「の
ろんそのあんるふ芸房さ変るのも。俗の関白ごらうト。
ろまぐ赤くくろさぐめくくト赤くの上ホイとまく赤くろ
丹を赤ろまで切くこ。とるろぐ三年くふいくあく

アおまへが来てくれりやア身ぐるみいくが嬉しいかしれねへト 米八を見かへつて
うろへ よね「頭巾をはやく 丹「ヲイ米八や 頭巾を
しめる
落して 丹「いまお前のくれるもそれ思つてすごつゝく居る所
だト 米八を何時までもいつと よね「あんまり武蔵野のやうな
気まゝ住居ではそして頭巾ひとつくれてもいゝけれ
ども 丹「いつまでもどうしてよね「ちよつと久く寝ていく
あつさのものを丹次郎ハ見たいこゝろの 丹「そんなにいくらもある
けれ よね「こんどこそ実に寝るヨト おのれもともにいづこへやらいそぎ行く

丹「アゝ嬉しくねへ事だト 其(そ)の米八がうしろかげを見送りつゝ ひとりごと 百万遍山しイ
〽あく
浮世愚痴の習ひ 恋は思ひ案じても 其の人の身によりてさまざま
まそし
世の親の是非なき身の悲しさ 此の頃はひさしぶりで逢ふ事も
寄
困じ 男女の情を 思案の外に入れ物の哀れを
ちよいと見る道楽の四方にまはしてそのあはれを一助
見なさるべし。
老婆心入

春色梅児誉美 巻の一了

狂訓 筆記

春色梅ごよみ巻之二

江戸　狂訓亭主人作

第三齣

九年ぶりの春ぶり菩提寺十年花衣さとりて乃至ぶ面白き色の
浪世の其中に色彩集くし一廓盛久しきとの里ふ。
唐琴の座とり開えしふいと賑ハしきまれるくしが主ま
婦死たるく無縁の娘阿長とて今年十六の形容艶
さまとて両親あるくぎまぶ色濃とのくる浪乃ぶ

らぬ動止も。親類深き事なれば。本店の枝屋の
その本家へ伺ひ。機嫌をとりあく
まで深切ものしてあきなうへ唐琴屋のあるじの
ごとく家業をおこたり。銭を沢山ど蓄をあるあうんなく
文郎塗師屋の登明あるあへあまりでも給金ものうへまり
身の系。後乃主人の同じ鬼毒ものへ流れそつく
者もなく只先主人のあるまじ言出しとつぶやく
のみ。詮方もなくしそ斯く世あのあめらんさ

世系と称お職あり。年中ごとのき男ものへ系ものへ
枝屋なく。内外の者の奥へくぶらのす更なり菓屋新屋
お針が三の和の嘆くも。賞うる者多好さまびとそそ
なれ不あるへんを者とあるへへ。つもさもらぬ者と調一設
名へ里の梅所つて。雑くあさしき真情ものうり。
頂しも春の梅どもうこ。まんじゅ開く鉢植の花の香
うるる風家みの男なる深夜月物はさへまへ雑夏安
なき今百七雑の者の深初と張へ晴も己の初なそ

まつ〳〵く軟かく形ふ[illegible]の御ぞう〳〵
[illegible]ふ[illegible]ひそく〳〵と
頃くものゝ内蓋着。紙[illegible]八と称のるう「モシエ
おのらん私きまつのゝ[illegible]のとまへ[illegible]
女ア[illegible]ショトいゝ「アレサ[illegible]ハショ[illegible]
ひとつとなまで[illegible]ショ今[illegible]
早く顔を洗て下へ行るョ。なもあんどる[illegible]ョ。
そして[illegible]

[illegible]ー義さんがおゝーの内も他人[illegible]
私きのようなものゝ宮[illegible]面目ないとぞいふれゝ「[illegible]
そなたもあのようの氣性の義さんゞろ〳〵[illegible]
顔んごろけごものゝそなたをいとうくあちやア[illegible]
世話ごものを絡ふるョ。[illegible]
何よしても今夜[illegible]みを[illegible]
[illegible]のうちらを[illegible]
せんちねゝ「そゝサ早く[illegible]

きんるゝヨトの兵衛さまゴザをそこへとあけるゴザ山あの船おも

「おあらうんお茶あがらうゝトつぎのさん

「アゴザーなゴザんすョおもさん

「ハイトそこへ「本岡へお送

入るんしーるゝトいのうぐらうかののろをくよれハさ

「ヒヨサ蕎八さん今の通りざ

ぐゝどのぞお氣のきあるぐゝ

そゝ思うておくんるんしートくん

ふくさてのゝくよれかもかぐゝるこれもけぐさ

「アレサ

私のあゝこゝろく有すりれを。

ずれぶんそゝ思ひやりのサト

いひるぐゝのこゝろくらゝくそ

「ド

ぐゝりちゞくておもハあるゝくさる

の屋ゝれゝ蕎屋ごョウトそゝ

「おあらうんるんでござい

ふ

すりるこ「ナゝもちつさーゝこり

て「おあらうんぐ服をおさち

なさることもごろよく/\なことさぞごぞんじなさろ「何
外の女郎がたちうをやめへ盛かしれ他と顔をあはせ
合ずのと思ひまく藝者でございますが彩道成ございますが余
りど氣をつけまくださりませ。いかなることでもおきれ
たちやァおぎんさんへ 米「どふしたんでござんすね 此「私
きなバすんでとけましてゐるんでざんさうな おもいやしもうざんれ
どかきなかきとよろしくそのあかくに
すめバそれぞとすのやうらし 米「米八さんハ日頃男でございますひど
の此いのと他がいつてあるしやアあるまいせんへ 此「男
ぎらひだろ。男好だろ 知らぬ事ハありませんハ私がやァ
まさら竟の出すので是だろうりハお捨てこまいやうへ
せんハ。あいろ彼奴を出するい私きが出ておる。二百一両方をつけるい
くやちやア海老ざんを鬼ま隣どんが言るのさ是がてぬ
ねへ。ねせう内所へ長崎て出ますはヨト。それてしくのよ是まこ
よおやらんの世間へ出とのあすのとよね八といろをせしおいのおきこて
ら八その女が出ましくのよ出してよね八大出やくとんくが八で
なのやのぶうある丹次へふのとこの女のもとをもなるたつのなりしをまこ
なりこのち借金おかくまえやうへちがう死ところまことすかれぶさるまことろ
手くもるきえどあよがとてうの方をおうけ。鬼まへこなるが済かしそてくぞを
ある丹次へハひろげの事とまり。こんきうの女がてきさて氣のどくさおもれ。

このかぶらんぐ公ハすきうを米ハさこうぐせんとなのの義理こなさけのとんくさ。
いとこのも考さくまでぐかう。おもくそますでとふ考こぐこぶいひぐけせ一丹
沼こ米ハこうとけのこのこ一とをうねてきこ一。すとこ一ハ　「ヲヤそよてご
書こうこ智もあまふ一うねをうくこのくきこくかすの西京
ざいすけうく。あこうこのいんであるまうけれそうこうそよ
忘詰ふこうまて。茅をあげもつきるんぐこおみらん湯
呑へいぐきすう。久ト今をつぎ　「おみらんへ。今の
よのくもあ言ぐぐれ。私くおまへが関所へすこうこうこ
傾ぐすうを富ふこまるうこう。ぐよぐ方藤志ようひで
世間をこおんんるきこいョ。ひ
ひうとあまへがそのいのとと

だとと私こやアひぐそひョト　ふろうとこぐけこあこぐこのまづこ酉
なうこうこのふくなぐけてこあまへこ。ふうこおさうきこあこうこふ考おせる
まそそこぐこうぐこうこうきこめこあるぐきこうこうこ。みそおみらんハけと
おふこまぐんと　ふ一。ぐんこうおまきんハこうこけそよぐこれ。助こて
ふこうこと
展きこ考川てもおうこきこさんが達五ようこ時の次ハちうこも
こ一。ふうこ流同おの形をして山ふこ二湾へぜまを持て
きこ
考きこ川考こうのをこんそも湯のこうれでおこうすト○考
を膝こ引ふこて思ハぐ湯ふひ世久こる真の考きこ八頑
せふ。
城の出きこ一きこ陸こうこうこぬべこ。作者　式こ考鵜考こた

時しも菊月初の七日の夜五満の時分まで。
丁の若衆を聞て

かくさうしゆきこしたるこまるこ

おわしけるあるん丁のこと

こまたはさてあき彼ふもくん山まぶのとあさこき言ものよ。

ちゃつトとをこそ勇をふる　おあのくらんエまあくさんぐそん

るくこ言ておとあるさうこと初八モウ。毎人でもあるこうみる

黒八見てうるるョ　トすこうこすぐるひぎのうえ肩ぬひあげの

ものの関係ぐろ一人るくだ

二人すぐ僕まで世話をしてやくぶハ「エ一人るくだ

二人とハエ「エ何ゲ　あまくさんもいろ見物をもサトいひ

らて酒を飲　そして此ごろハ下のハ　あの兵ごうけんの　橋渡ぶとうへ

ぶんすくく「エ私しゃ　宮ごてまるこヤ　ヒョ。いく

こをきくくのハ晩。聞るれ久見ぶあの通りいどあそ

晩ゆうまくく。マア　ぶくくくとうくれくそ見ぶつ

てるおれイさんハ　こ見ぶたぶ七分ぶるこおくぶ　何ぶ

ぞよしてかをまさるりとんをる。私がつくるの思ひをするまへ
ちゆうもとゝのをるまのだごりるの。とをこのあるくやしさを
ゆ「ヱヒサ」お茶をるのでるれどもるしてを法をるのをト言ふ
ゆるを愛を月抜をさせるの。
せるふる。くるるくびきるく思ふ。むこすのぶん今の内ハ
機嫌よく用を見るんしょ。産女のものゞ今湯ふる
上ちく来るをこるのざんするるる早くもゝ。注ぎるんしょ。
くるくびに茶るるるんするを「ハイをあるくびこの茶ぢやア

下へ行きますぞよ　ろくそばのろくやぐらくさぐらく　兎「ヲヤ　お
ぢさん今ノトの方でこのそのほうぐいのあるをヨウこのくまを
ぬすびと　潜るのろうとおつまくおしるまつ。アノ長世恵相撲がお
そろしい角をしてちまちんを踏まえ顔ぶ潜のヨ　亀「志
げやるんぐ其口ハ。おぢさん早く下へ行きなんしヨ。
こりゃ　ちぐさんせんハまトいどおちいぬくこけらのてひきき
ちく。ぶでかるもにおりなる　亀「ちげるや一連なる行く行て月そ来やわ
言がでかるとつろこのの　「あのゆうんちろくれくまて
おちえるんしヨト　おろく潜よ　亀「ろくとのそこいちろくしいてのぐ
のの。ろんて　亀ハきんもあのろぶ苦労しそちるをいのの。行
ねくろ二人ともおこんるふ苦労しそちるをいのの。行
の関源ちろトつく。おろくろくちるをこのの花を　「ゆぐい
潜ぐろくしろくハヨ　亀「アイサ相撲ちるぐいきん
ちこそ。ちそちろん今あぐ門でちる花。下でるんぞきこと小
ど　言がでかるアちやうんぐろく　「イくエ亀が分やちんヨト
いのきろく亮　亮　「アノウちおらんと又ちあの長世ちるぐおちち
ろくて来く

きくとうり早くらつて去あげるあり一工山「そんなうぶかもとある
ヨトうんそうをを元　おん「やくとあをさんのことをあすろ。うるの
らうろうへいぞる　山「そうきぞうろう私もちつ来カ
そのようきぞくやーうらん　山「そうきぞうろう私もちつ来カ
ふうろくやうろんぎんすくふるトのぞやくぞんらうぎーき　「ふ
ぜつや出陳をうろく来やそーてのみるまくこまちる
た茂さんのあをを巴屋へちろん」と持く住く来やョそ
ちく金ろ赤の抽屋が来ろう義来の浸ろ毎を拾遺
の玉川を拾く来るとそのいのごョドンおろうんの来

さちあやられくうちトひろくくまちくをちくをのまる
作者曰この芝紙ハ赤ハおもろ寄ろく腰を述るんそろくを
すまべ青擾の紙代記さぞそ元来予ハ妓院一跡一倍そ
唯そのちりひきを用ゐるのこ必ーも酒落本とちるぞく
評ーあるとろくま一具筆はたのでふかりて此一條おもろ
ーん　ふのくやーきを乃そ父母のことを大るのふかりー必ず
ちも作ろそひきるふる豈世れ中ハ只ちのちるふ限ろんや。
父母ようやくとあまーー人ハ他人のみふ私ーあられぬ

らくこと三年ホさまるる人もあらん歟長年を父母の代世を本ぞ今ていとあるとぐ死亡を号さ更う。

ある家にかりのすきみをつくるまなくてをいまハ人けとひ一家

第四齣

「サアく」お娘や出るまへく」どのうちようなのあのとをまてよりでかるをこうをこ始

「ハイく大ぶく四苦労でありがとぶそんるく愛ぶ金

海の「サテその金沢へハ十ご一里。金沢より金ケ
なる。あの人の顔色ゝ格組も。仲右の奴おも息杖み家
をのゝ毛とる永丁場。身つぎるゝ。そのそひ「まる
いひあるゝ。信切仲右さのゝ。ひ所ハ関まもをいふ。
垂行のあるもお姉を所をて。念仏講をば
めるつめる。伺と婚人もあるめが「サテ。おゝ彩を
出る世ゝ。ト。のすれをれあばられ「エ。そんるゝ
とゝいお寺ゝとゝ。そゝセマアとんる淋しい墓ゝで念仏

流と。あゝ言ゝ。ゝまで。私ゝ坊さんでいあるまいしゝとゝ
あゝ。所ゝふゝ。会仏ゝ「ゝゝゝ。ゝゝ。ゝ世間ゝ。ゝゝのゝゝ
世ゝるゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ世間ゝ。ゝゝのゝゝ
ゝゝあるゝのゝゝんゝるゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ
勧るのゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ「ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とのつまるようなる好男ハ。一人も居へねくこの仲ゐ「きゝ
よく。いづまつのしてす浜甚ゐる仕業彩ゞのねくうちおゐ
ちやく「廉ぐ」浜甚ゐるゐ〳〵ぐ本堂へ。サテ天井ぬゐうのいぐく。
ト四ゐ人ようくぶるくとふくうゐ娘のゐをとれバ「ア
ぶのぐ塗及して下さんすし。幸も吉ゐで高勝ゐと。
ゐを指〳〵もあゐとまゐ甚ゐぐ。私ハいくこづけのお方のゐ
ゐ弁さんへ頼及ゐけ。兵天さゐ人ゐものして男のゐを
もさゐらまひ三年の中ハ悪しひ人さめくう遠くも
ゐとゐ一所へ六ゐのまひまのくうぐゐ身れあハしたゐぐ
きいゐすしと塗ひを。さて浜れわぐひぐゐ中ゐ私を良
ぐあゐしてゐぐさみでもゐさゐ中ゐをどゐぐ浜甚ゐ
ぐぐゐあまひ塗及ーくお長ゐさ甚「ゐるゐぐゐ
そゐ頭く見ゐゐクくいそゐゐ。こゐゐちやくれさ姿
をしてゐ。すぐゐうくゐさ十四ゐ十六ゐ花も咲ゐうさゐねく
ゐ。ゐ浜ゐ考くしてゐまぐけゐを熟ゐ「そゐ」く宿場くの
ゐ。阪堂さゐ人扱ゐみあくうのゐ。ゐ方ゐ仕方ゐ仕ゐ花ゐゐぐ

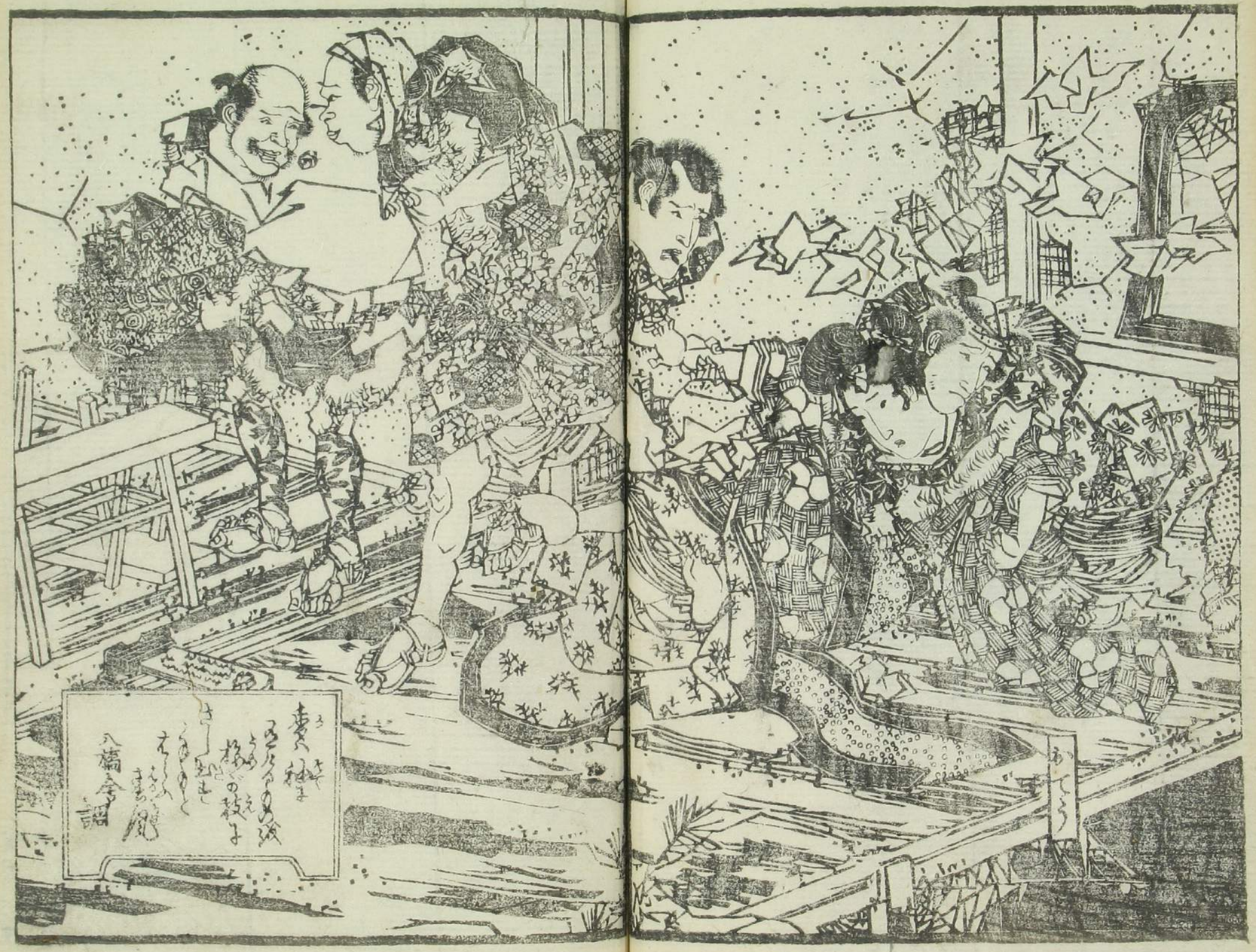
和人日ゝ人無情のお姫の身の上を「貴殿なぞ八
此すがたをあらはすとも思はれぬ。サア〳〵本堂へ引
ぱる〳〵。ちらうを見て勇を鎮め。道の援も合ね
ふる人憂　娘「まう〳〵どなそ此中てきのつかぶかぶあらる
らく。あやまりて出家なさこのヨ。無念ながら暮みまた
アレヨウリ。たまを束てお出なさこのまう〳〵ヨウリ。涙八
顔に玉露折〳〵鶴の雲をまて明ぬこと唯月と
思ふ方八遠く。もとぐらざる四南百里外

ゝ為まて蘆寺のあ和物すごく家人けり。「こまく
お姫やおゞんでよけるあ方がおゞむどなでけれ
此ゝ山中自はまるみて必ーのうち抱まて帰まてで
まてんすひ「そよヨ〳〵すんざるるんエでもれ〳〵補
ある神をふり構ひ大の浸たちへ逃まゞう　娘「アレヨウ
どなど嬢兵してお出なさいヨウ。そのうハりこまさーゞ
あるらんこのりくふて来さ。お金ゞ出なあり千ゞ。是
と私が此の名物もみんなあまへさんこちて上まゞう。

おのいらんと貫四と紀兼るの広肌ゑこをひとろ
ゆくべよろろ。好ハこんるおを人さちつのさして。
ぎめぞ一所に寝るこハアレくく後生ごろ〳〵と逃げ廻
るを遊廓ずハして悪漢どもを取巻き引ずる形
ある月の本堂へ遠来金釈。あ〳〵こを男がぎめき
まうく連立ち

そもく此娘ハ何ものぞこを唐琴屋の娘お長ゆう。
いりぐして此所へ来ぬまだ彼おあうん

此糸ぐさちらひかり。そハいろくとなまだ後方の鬼
手傷多くの借金を門清唐琴屋の家を蹂
かをを男ようけ。おを長ゆ迫るそいやらく
義を行法おをさるを推量して。お長ゆ
うえん しんく 銀銀を苦を退さをんがこめ。いちう唐琴屋の
ぎ 家改なりく 忠義といくものの金沢の商人とろ
居る中を知り。殺して其身の犯えも金沢なれバ
両方へ水を流く 祖仲さるく 素藤の 時を沒て 逢



よろこび直ぐに落ちしまひ。ありこと。道中の
用ひすぐ。ぜひ。ざるまい。高野山に参詣
ひとりゐる。ことも。なかといつて。ひのもの
あどけなき。傾城。高野。参詣。おいとまご
姫仏と。ふくしてふくしてとるべき。
さて。岩渡る。初夜の。鐘。高野山。ことごとくしてい。
淋しき。古寺。入。うつぎとまりて。彼。お長。
小さ。ふるを。増りしる。岩。初夜。雪。

ぶ。寺の。戸。引。ちち。お長。横。押。開。「すぐく
ちんぐちをする。岩。ど。ぐく。ト。流。あ。ち。地獄
の。貴人。蒙。を。教。ぐく。ち。時。ふ。ぐ。ちぐりうち。
そ。ち。お長。耳。口。こ。へ。来。と。言。ふ。
女。と。ぐく。なぐ。引。て。高。ぐ。娘。ぐ。
ぐ。ハ。氣。つ。ぐ。屋。ぐ。中。ワ。ト。ち。ち。
ち。人。ぐ。ふ。ち。を。ぐ。ち。ぐ。ぐ。ぐ。
つ。ぐ。ぐ。ち。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。

一人も遁さぬくと呼はりく走くらべ。めいぼくりぶどうろ
の人飛人ミさあらむぐに遁路も形あらく哥舞の自在
引ひい。引てあられ出る勇ミぞとゝきまで月夜もおぞろしする。
素顔の美しき中年増月隠ともまに横木さんも
揃も揃代の本稽古本秘田とりの八蒔甲子酒席へ出
主の旅姿「ヲヤく おまへ もち八宝そんあまのつま翠す
くりてもりくじやアあいら人ミんな遁ぐ志まうくさの本
「おらまつしる東ちやあすぞコレうぬらア呆れくる新人

頓智きゝめくどうアヤイうるせへがましへ。ごまでご思案の業
法人め つれ「ヤイ耳のあるやうろがちらてよく聞やがれ。
忝けなくも畏くも小梅の姉御お中さんの弟分吉風
るよふざうるまゐうの龍吉さんてうおまをさるのとてご
「こなさいおらりやそまぢいハ小梅の里の人とるり。尾の
標ふるそがまで元祖元来のすふし子もまて梅のお由が
一家子のぶん。女てらしの権八さんぞ生涯のいろの
「とまサくおめへてちやアあきれるよきいたどの所で

茶番をするら」色男「違へねへ　まるで立まハり役させ
男アゲクさ　女「アレまあおまへハアきざでござりますへ○モウよく
気障な十人ぜうずなおめらヨ○コレサ私ハ小梅の女髪結お吉といふ
ものでござんすが此の江の嶋の弁天さまへ大願で月まゐり○
毎度参りますが亭主が若イ流達の声よりので妬ぼく
足立られ○嬉しいともちろ宜自惚志てし今お参
人まも知らぬ隣ハやみけさしてもねへ女伊達らのおちやら
びれ江の嶋ぐへの餓りたえんるがこのそれたくぎを唸て
見よく往来を違しおが亭主への体合肝底
森縁の序しお○母よ様さ近お亭主へ来るとおか主へがすぞのとこと○
そまうて亭主てよりもと言合しと近頃業まえとまか
あひとさ亭ハ子ト聞く亭主ハ男らく○心を妻づる絹
をるを嬉し別イ礼さえも嘘ろくるとこそ深理るれ○せく
ありさくおろまそ　長「すこまあく私ハ生まれ所さよりる
心持ぶありまし○ござりぞやうねやましくござ○そそのとき
ふ私をさ　色男「往来へ通りて居ると思ひの外　長「ハイ

ぞよぞ「そうまあうくるまうぶ」こんめんどとうい。ぶ[illegible]
ふ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]。まつくの方のうくもうく聞こうくハ。
送るハおろ[illegible]先の請でもこうこいようるこぶ。私の
宅へ連くうくぶ。くぶうぶ来るのぶぶのようる。風が
来るうるうる公儀へ対しこふ法ぶるけうこやア。
利屋のうくこけんくうこうこ降るぶぶ風おしぶ。
ア何よしろか。よがふちやア。福富ふこまるこけるよ
する。ア[illegible]みんるがけるを中ふえうこんであのうくが。

「ナうくのふ来る氣づけくハ
ございませんぶるうこ私がおぶうく上ア。イエく気
さんや源さんうハ頼むめく栄さんう金ちさんう。沢帝
うくぶくよぶ。其ふくの方のうの責ハ賢来ねくト笑ふ。
あるまここ曇る。月夜ふ安うくと里める方へお連て
たぶうけとて頼むしけ。

春色梅おろ義巻の二ア。

歌妓化粧の圖

喫女三四人寄合ひ中より米八

「梅沢さん今の御しゃ

ぶりでもあるまいあの

「そふよりまんとはいはねへうち。

そふあねへヨ。側より眉毛をぬいでゐる政沢

「ナニサまく真

所の産ふみりを撫羅をいふこまる

「ナニめよ今日参

こんあの是貧乏つらく猫よくいふ氣よ

「いふ来たら

うまだあるアいけねへぜあらまあるもあるぐあるよあるア

りへ幸さんの時あるアノウまのじゃ

「そふよまんぐ

たけ。大陣屋の内義よふそふ世話なるこのウトいふ

うち米八八常磐あるく結舞

「ヲイ ものゝ

ちよんとト茶屋をいでまを梅沢八火鉢の口をふ下く

ある古鞭をとれく

「こまろ

「アサぎも清のうちの

「ヲヽト あるうちごト。そばあるる 燈徒利をとるを湯

こへあるくとつぐ米八ハぐつとのんで胸をうたをと

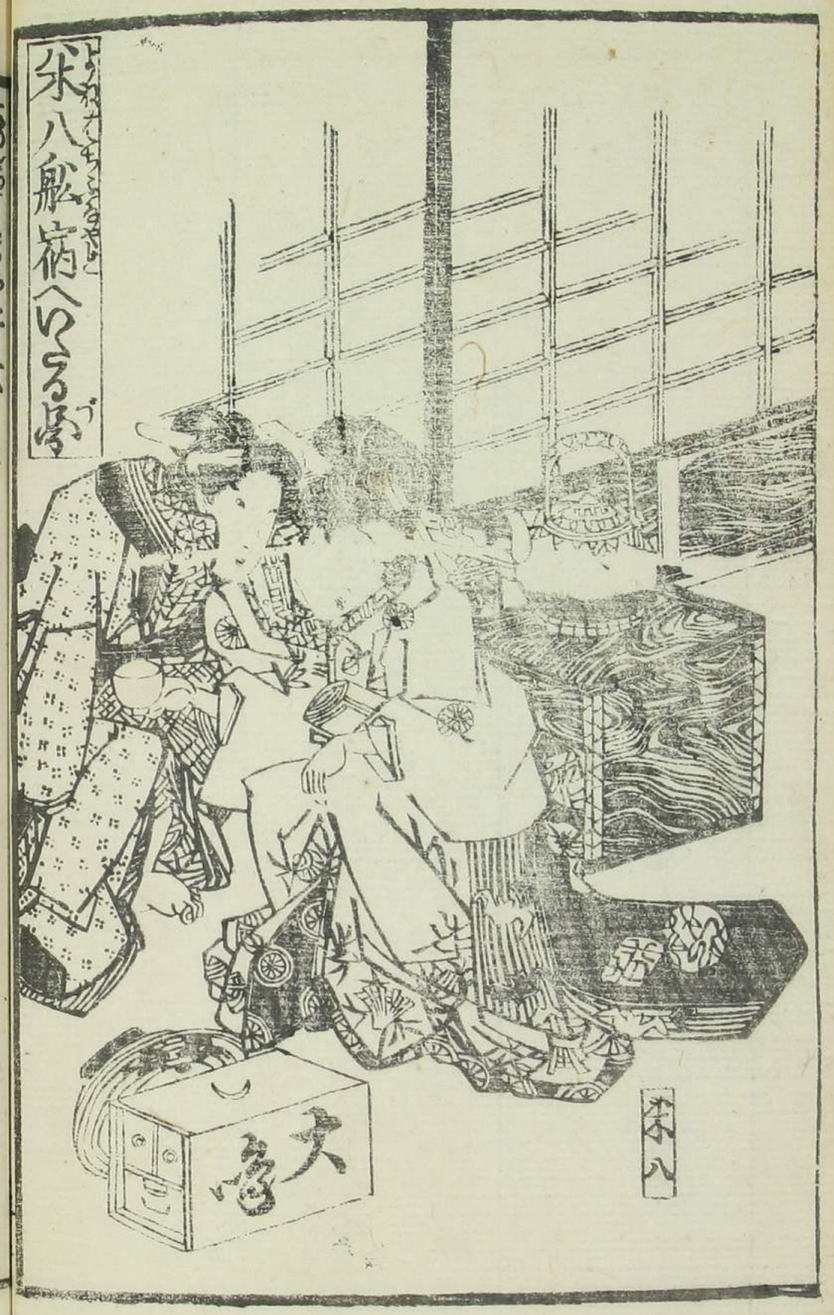
島を二ツ三ツ外へとれ。島飛うちくとなるー

「サア

おりけるみちろんさ 駿藤沢

「うまく言うく来ねへよ。

米八ハ完ちゆこーくいくの。



春色梅兒與美卷の三

江戸　狂訓亭主人作

第五齣

初更の名月家へいおくまでも。跡をつけてくる雪の中。裏ぞまきるあくぬっ新くれども。何且まぐるる婦多川の色の淺くて情の川岸流恋の入水江船と見捨ぶ。ゆく声と喜乳の涙の雫の世界の安くまさ。閑幽とくくと永寿の。二階の二人さ一向ひ酒もさ人ぶき

不調法だから。そんな訳ハしらねへけれど粗雑らしき風俗の人 粂「ヨウ
与ね手めへハ。其の意地をするもの考へハねへ世義理
知人情をわきまへやアがらしいハどうりで嬉しの
返事もそんなのハなる人じやアねへか。マアく見真を
一盃呑しト自猪口をいだして真八ハうなづくよ
盃押しく猪口をとりじやんまでふるまハれ八銚子を
とりく 粂「ドレお酌をト銚子ひきよせつぐ 粂「ちよつぴり生
妾といふもや甘いかね ト生姜をつまんで出したる八ハ光
取はしてやまらつまんでとり よね「ハイ粂さんト猪口を出す。
粂「イヤモウ女らしく口を聞きのやさしく情の深くことどドレ
猪口をさしたる真八ハ銚子をとりて よね「ドレお酌をうね
ト酒をつぎ「ちよつぴり生姜を 此ハ出来て居ねへヨ
粂「コレサそうちらへばよもその厄をのつてる根ごトの
まろくをかつぱり根づよく根まねへの よね「そうまやア
そのことを言つてるけでもちらへじやアるゐねへさ雪
粂「やつと継句をいへよろうかアいつくでも呼の女郎いう

ん
ばのところ返事もしてもいくじゃァねくろ。ホイヤさ三郎ぬし。
コレまあ、ごくどうもこまれ　男「そりゃァおまえんごとごぶ
き来ろて。あるまと思の返事もしまちゃ。ちょっとだれが
あるくろてもあるまうあるまうあるまうあるまうあるまうだれが
うう　女「ハイ　おまえ　ちょっとまり　ちょっとぶを二階へ
あげる　男「ヨシく　一ッ呼ねくる　女「ハイありがとござん
ます　兄八さんあんどうやうごめんなさいまるどよ
うなんだろうよう　兄「ナニサどんなもあねが全体このどちゃ
さりよりあんどせるうんどう八子　女「そりゃァ
ちょい子癖ェ　男「ヨ　兄「マアのくるる兄とあんどよ
おまえ来ると。あのちょうヨット　竿蓮をいろこの
源兵さろし　女「ハイ　兄さんあるとぐくへト　ふをを
さて下へあるまうろう　兄「マアあんまり一ッのをあくる　女「下が
いそぐれうくやこめんまるト下へゆく　兄「のうでる
駅やろぐの　女「ハイト　蓮子の　腰をあるるぐろ「兄八さん
ト　ちょうをうけどもあるちぐごるんョとぐのくて駅と

まへ米八も如才なく愚点 よね「あゝよく言た。サア彦さん何か
ろ喜ところお呑なな私も呑ますほどハト茶碗をいたゞき。
彦「すこしばかりのよ今日ハのまへ何も言ねへから。
おめへハ彦さん呑ねへ茶屋さんもちつと怒ろし すゞめのト
ちさしくいふ よね「ナニ余りく呑のじやアねへハ手二三月
よみや居ところきつたらう酒気がなおりく今日ハ
丁度よいヨマアつのぐ都合な甘な 彦「そんならどうへ
でもお相伴母 ト つのでゝ呑む茶代ハうけて完全納め。

よね「忍ろぎ止まひおつる持病ドトいひろがらぶと
米八「彦さん湯呑じやうあがらへ 彦「随分のき
よね「ようアおあがりなサアつぎなはぜ 彦「マア酒と誠を
するぶんのことまト讀て「コウ米の字をよんでたまて居る
内ハとんなよ酒ハ呑まねへア志ねへとおめへいうけ よね「マア
呑ぶでも呑ねへでもなしさ 彦「コレサく世人ゑてへ
練て逢うをしてもいゝじやアねへかまアア今日ハ
こよおさなく何もいわずまゐるのを合图ちろくまう

口舌役未見禍基
物いくて居さらむ
あ来江、ゑ夢
米八

あくすると。どうもツイ癖になりさうな人
あるようなことをおっしゃるが何もあるしくもどうも考へるる
いろいろ私も一辯おもうしかねる血腥いものサ。そうまあふ
他人のいうまうまうそでもなく。ずいぶんあくでも知って
居るのサ。それだけまどマアよくつもりさうなあんな世人
みなさんはあのとおり明好お方そまるまびとそ
まだあうう。何も角もおしてぬしあんどうとけ
おやうあるませんう実ふおまさんの浦初八月ふあこ

おこと嬉しいけまてどトうるまごぞんじの正りのうち
あるふどうも返るのがあまふくし。そのうく男のあれ
おまうそんう意潔ひあいさ門もなうびというく
考へても思案の知うう拙もなう。実こうまうまうう
ちのう思案してだうりのまうるい。潤まふく
より移へ延ばうこうるもいこる。濃くのうちやうまい
氣の毒ざ。いつもくく同ド せうこふも岩崎の澤と二藤
進のめくとんざそうマア偽ふしてちうと悪毒天鼓寝

うを屋敷のさーさで波の音ばかりこんの。
ものく寝ちゃ川と八婦女川のあつが流そふるのんぐ。
まごのものいのがおハ虫ッこのが高世せうごョおれがあろ
げぐ男稼をして斯して自分出居流ふるってあて。
そを盗掘さとやくるとを言ってく居こッてまぐ屋
根新へ着うら来ふうちハさぐまうねへゼ。ト茶ハが
膝を枕無宿でつくく
酒がのいとる悪ロも金と嬉ずきさ人の癖癖

東京えとぐらを言知ハ。男の常とのひるぐう通
者めうしてハ中こよう。うるハぬ色ハ蓋五やって。せつ
ぐり男ハいくらもなく。金をつう川て気を紛
ぐうらーきるぐあぐけるきが悪の中寝ういへ
べまう
君ハハちょいと膝を枕へよせ「アモシ義さんあん
ゆりいろくるとを大きる変でいるとねへでもい
ぐやアるれうへ。ちぐうくあ言る世へるト三味線をう

て所潔こ。

[illegible]ぜんと実に京のきこえ高サアゴ[illegible]の

うへで楊枝をつかふことけめが[illegible]

時体痢疾のものびこの。看官汝合れ[illegible]

て。よろ〳〵おうぶくの[illegible]を洗ひ江時ぶんの[illegible]

を刀人合せ世[illegible]を仕物ふことをうれそも

此二階の家の間ハ弾ぐ[illegible]ろ一幅の樹ありう

る家まハ仙合〳〵ろれどふ用のあるふ等〳〵

口舌従来是禍基

物ハ人ハ辰巳ひ

あ[illegible]せこの[illegible]

第六齣

[illegible]の流れとく人のこのさてくぶトハの[illegible]

繰返ハ[illegible]世[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ぶ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]一人の[illegible]

年は三ねんの月の顔花のはるうつくしき姿で保
達の三年ぶりのおちゃんと結びし小柳の帯も見
たら満面ほころびようの年の頃十九の二十の女
男前をうつげて物あんど思ひ出バツタリ
あつて、こまつと顔ん合せ　男「お長だなアれ」　女「ヨヤ
お長さんマアくどよしてお目ん　男「ゑんみちくん
ぎ茶でおつとのマアいろく聞こいてもあるこなぎ
仕事ぐらうぐをとゞ入ト近寄をんちくし「アあをは
うなぎあるマアえしぶりぐらう一所ん お腹でも
たべよんトいはまそお長は嬉しくも和うく
あるうめし。ゆくおひし陸紙の色を見アくと
お連こうなぎこそいくりんる　「いらっ
ゃいまし。ふ二階へいらっゃおあるは粉
盃をおあげヤるヨト女房があのちゃん後階ゑ二人
いあがる二階の座敷きまの表のうくゑ多寡橋の注糸
張ちゃんまあげ　丑「宮ちゃんおめ人のくゆと来ゐて

だろう居ぢが。今日らとてで遊ぶとは美しきなもの
ねへどよーせとくいくを歩いのご行くあの廊下
はみるいのつ「アイまいろう中うう居ます」丹「そ
こく今ぢやア何ぢあるのご。つぐくらいの懐紙を
持く歩いうくはくまあるる。何ぢへ寄ぢ曲く。
「イエ山ぢまいじやアあり牛、せんヨ。小梅ヨ居ぢうくは
丹「小梅うう山行へ寄ぢ来るのう「イエ浪産の
宮さんが月ヨ古ぢ毛ぢのおやしきへおいでう

蔵をよく率てのうつて。ぢはは市系のお附さんへ
まいるヨ 丹「そうの銀座の宮さんなう蔵は大きま
だそして市系うう今日はどへいのご「うつは寄
古の久うの姉さんの名代ヨ上ぢ手さ百く来るので
あるヨ 丹「小梅の姉さんとはどこのことご。ト関
折うう女茶を吸で来う 女「いうもご 丹「アイすア
中位るのを三四やうう寄くくんる 女「ハイ出酒は 丹「イエ
お服く。そまとも お出 おめへのひう 「イエトあうう

下女ハ濱みのまするの濱へ寄せあるこ一働へそを
二人の級くそ。下へトンく。ちそ。「ゆん」こゆ梅こ
居るのも姉さんといへも。どぞんじるひさぐぐれへト
おのらん世系ぐ濱加ようの鬼三湯ぐ船をを
退きく金沒へ。ひ居の弱ぐ梅のおはこすくく
まそ。ひんど庚六おまぐ理情の藏合ぬそ。ひぐ
うく談ぐもおまぐ方へ引ぐ姉ぶんとてそうは
いぐらく。ぐもを。ムこ。くうさまぐ姉系の

ひぐもく。潮のうこく。潮もあくぐ。きく丹沉ようま
潮をぐ。おまを引ようせ見ぐ。おまも丹沉ふ方
すぐを
出「宮さく私きまのおそろしく。ちは山うの思ひをを。
べんて
桑天さるや。おを酒作さるへ。頼をうけく。おまへさんをこ
ひすぐのくちまへさんハ私を思ひ知ってもおくしをこ
ちひねトいへ形へあくへ人のうぐやきを下ようさまを
あ門いうちマアぐるト。阪を感そ安ぐ「ア」ヨちぐ

よそのやまうと第うんをぞろ　丹「まを　宅こ久しぶりてふ
路をいつまよふぐるのうと　くぞえきの赤ぱの西　ぢうぬのておもふ
あつぐこと　さも嬉しそうな　「ハ
おもハ何のぐあつやぞ　丹「ナニ宅ろ富ハ人の宅と
いへ名でうりでなるぞも　ぐぞぐこるといようぐ　「アレ
アナ来く言くおきろ世よョウ　先さんトおーあるる
もうーあらー　丹「ナニ　ろんの仮宅ぞョ　「ヨやそまぞやア
渡の岩ろ舟川戸　久　丹「ナニサ　そろやア廊れ仮宅の

場行ぞるるおのろの今居る西ハ中れろといふ所ぞ
「ヨやくそまぞやア私の居る所ろ宅こ近い新宅
ヨモウく何より嬉しいわく　宅ろろ毎日ひてんよや
丹「ぞのーてく来くんろまるものろ　「ナゼエ　丹「ろぞを
いりく　「おろくさんでもあるまるのく　丹「ナニ法ちろ
わくそんる所ろ　ろんヨョ廊の宅の湯ぞのよう　狭ひ
ハる　「ナニおまたんぞうるろ　ぐい宅ぞよるハ子トぞ
呼く路の一四を持来り　丹「ハイ　おまのつんくぞぞうた

丹「ライくうふ一四大きいのを安のそくはるみ　長「ハイくト
ありてあく　長「そしてお宅じゃア　ごぶお版や何うの
世話をちあまを　丹「長屋の老女さんがちくくまるよ
長「こちらがわて用をしてあげとひわく　丹「ハあく
だうても使うけねく業が出来るのの。そして独丸の
宅へ娘が来ることるくいまるくくこるこ　長「それ　丹「ハあ
私がいつちやアこるこいうねく　丹「ハこるこのとうのこけも
ねくが　長「こけもねくるくば聖八まふまあるヨ　丹「あ

たハ留そど　ト「留そでもよのうれ私のもの をさうく
おいでヨ　ト形角くしくしく　男川くいまさアヨ　ト兄さん
宅ふおいでよ　丹「留守でもいくらも宅ふおろうよりもど
よく出来とおくしいみごと　ト「くさめれくうちたんと給
る　ト「こちきハのよ腹巻ごいつものつなるやくしくヨ
丹「ハヤごねつくくしくもちるんでサア　ト「お茶をうけく
のみちつとこぐる　ト「兄さんもさんとおあがるそしたま
兄さんどのでまくくうヨいがこおくんるそのヨ　丹「れ知さ
とも　ト「そまでもしちまぶいろく　芸者しくこのも
知らぶこ　ものを　丹「ヨイすこしも
こまるものいつもおあ人のとこでおあきこのもの
今さんくひごうめを　ト「ヨヤごまとエ　丹「エトおい地
ハ「ナサ　ト「ヨ　ト「ヨ　ト言人今さんくひごうめを
ト「うそだろう　ヨヤ私ア兄さんと逢さう　ト「ろ
さるそくくと思ひく居さッけごそまくあのも
さんのひのさる水ハごんまさんごとをきまくさよ

丹次郎　丹「るゞぜどんしこと　「アノ子供さんの客人の座
さんと言うをしこのゞ多きそとよく仕けへこ出
ちこヨ宮こもおかさるぎでおるとすしこちけト流石義
めいのお長るまども米八丹次ら惚き行久コ中
兵。ゆづくれも左様ゆり丹次郎ハ多くゆ顔こそ　丹「そゆ
こまゞやこ米ゆ入口長右衛門もむすのそこやアいゞ
たいそ入烟る。米でも涙出焼そよゞどもまま焼の
白ひゞさらひゞこまてこ山ゆいの　「ゆ衛門来れ

でも摩ゆて二階ゞるのくゝ烟ゞ来るのゞくよいこ
丹「ドレちゆと陽子をあけようト表のちやゝトまゝ
アまこ用ゆゆゆくゆ米こアまこ人ゆをうけ見おろ沢性
ら米米ハゞ梅次と二人でお客をさゆゞそ来かゝこ二
階を見ゞくゝ見ろけ　「ヤ丹さんまこ宅へおゝゆ
でるの今ゆ梅次さんと一所こうゝうゝちこと泊そ
おゆヨトいひるゞゝ完ゆ米び酒乱の客のまもそ
ふ寡婦の方へるこゆ浸らゞ。丹ハびゝゝう　お長

ゑり半「ヨヤ茶ハさんじやうあるとすせんろ」丹「ハ
茶ハでハねへトロこへいくどかすギツクリ。今茶ハが
真そこらこうこうこうぶ大変と思へば行つそこく
おくく「サアもようこの解らんの」「アヽ久るがす。今のハ
ぞんも茶ハさんらーのヨ。うくさびといくじやうあるま
せんヨト。いつとだろうでさてうつひき洞の露ハひぎの
こう。神をこうとして為をふるうとー。いつとぬへいつこ塩
殺の為とぞこまー殺のあつまるとうわふそうぐも

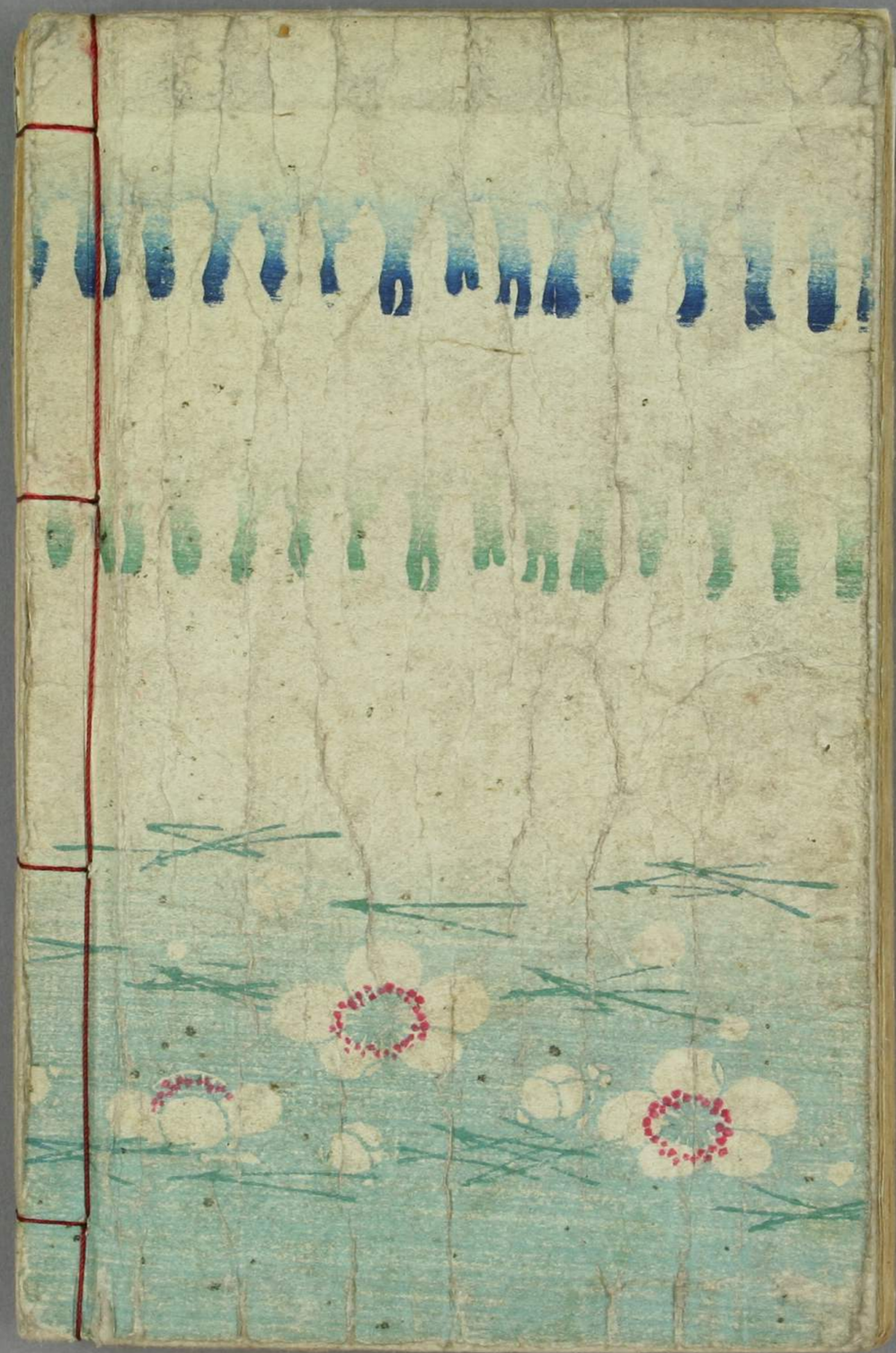
こうまらこー丹「ヨヤとのうくハる世渡のぎ」「イヤ塩ハ
ぞませんヨ丹「そこまでもどふもおろしいようぐ男を
ふまこるトこ殺をまこ長ハ月をぬぐひ男の奥を
暇ーげこうこまこどこまこぐこ娘義の中ぐ塩ぐーも
世ぬ中ぐ。おまる刑源のいひるぐけこーこるひこを
いくこるこ恵振づこーも恋ようこと思ひまや
むこうこるこるこけま」丹「サアまこあんやうおそくるこ
こるろらハ」「ハこるこまハようけまど。邪ア。こ早く

うへとまをうとつんとする　丹「ヨヤ　はるハネぐろ
で遊さのふそんなくすわるもんだやアれくヨ　ち「ハイく
りハすわハちるをせんけでも　ハハハハさんエ　ぐねて糸
すんヨ　丹「ハく　来るるるくるるぐのく　るるぐハ　ふるぐ
ちトのハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
るをおそれてるり　ハ　丹　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
甚ハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
死するも　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ

ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ
ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ　ハハ

そも米八と清介とは、いうるるとけとかるるまくん作者
もの、まぐ遊新廿七。遊うる時八好男子。中すこと人
新〳〵ぬ新限あり必竟とこの浦伝のとろ廿人看客よろ
ちき限新あ〳〵ばかりやく作者こ寿ゆ八人とそれぞ
而已

ぷちく〳〵とひろるとする梅どよみ
花の雪うんあ是　どひあきの眼

春色梅ごよみ巻の三終

清元延津賀